

一二世紀初頭ハラブの住民指導者たち

谷 口 淳 一

はじめに

12世紀初頭ハラブの住民指導者たち

遅くとも一一世紀の前半から北シリアの中心都市ハラブ（アレppo）にはライース（長）と呼ばれる人物が存在し、同じ頃から史料に言及されるようになるアフダース（若衆）という一種の民兵と思われる集団と協力して都市の治安維持や防衛などの任に当たった。また両者は、ハラブの支配を巡る抗争にしばしば関与し、彼らが市門を開き新しい君主を迎え入れたことによって政権が交替することさえあった。このように当初はハラブの住民を代表する形で支配者と向き合うことの多かったライースであるが、一一世紀末以降は君主によって選任されることが多くなり、次第に支配体制に組み込まれていった。支配者の後ろ盾を得たライースの力は以前にも増して大きくなったが、その半面その地位は政権の動向に大きく左右されるようになった。そして五〇七／一一一三年にシリア・セルジューク朝の君主リドワーン（Ridwan）が没した後、ハラブが政治混乱期に入ると、ライースの地位は極度に不安定となり、短期間に多くのライースたちが交替を繰り返した。こうしてライースという旧来の指導者が力を失っていく一方で、ハッシャープ（al-Hasbi）家とアブー・ジャラーダ（Abū

Jarada）家という代々カーディー（法官）を輩出した二大家系^①を中心に、ウラマーやシャリーフといった宗教的な權威を有する人々が十字軍勢力やイスマール派^②との抗争などに際して住民の先頭に立って活動する姿が目立つようになるのである。

以上は、かつて私がハラブのライースに関して試みた論考の概要である。^③ただしここではライースの分析に重きを置いたこともあって、新たに台頭してきたウラマーたちについては、十分に論じる余裕がなかった。本稿の目的は、その欠を補うために、リドワーンの治世末期からザンギー朝がハラブを併合する五二二／一一二八年までの一五年間余りを対象として、この新しい動きを具体的に検討することにある。

一一世紀以降のイスラーム世界において、しばしばカーディーが住民の長として活躍するようになることは、すでにカエンがハラブを含む各地の例をあげて指摘している。^④しかしハラブの事例を紹介している部分においては、あくまでもライースが議論の中心であり、ハッシャープ家はライースと拮抗したり協力した存在として言及されるものの、その動向にはあまり注意が払われていない [Cahen 1968: 242]。また大川原は、この時期のハラブの政治過程を記述する中で、ハッシ

ヤーブ家の動向にも目を向けてその影響力の大きさに言及しているが、やはりライースを分析の中心に据えている^⑤。他方、シリアのライースとカーディーに関する專著を著したハーベマンは、ライースとも呼ばれたハッシャーブ家の人物を他のライースと同列に置き「公式のライース」として分析している^⑥。

以上のように従来の研究では、ライースに注目するあまり、ハッシャーブ家やアブー・ジャラーダ家などのウラマーが果たした役割を過小評価したり、逆にハッシャーブ家の人物をライースと一括して論じることになってしまったのである。この時期の都市内の状況を考えるためには、住民を代表して行動する人物は常にライースであったという前提を外して、ライースたちの関与が見られない事例も含めて検討することが必要なのである。以下、まず第一章で当該時期の事例を列挙し、第二章ではその情報に基づきながら、支配者および他の住民との関係を中心に、ハラブの住民指導者^⑦について考察を試みることにする。

一 ハラブの危機と住民の動向

本章では、同時代の証言を多く含む TDM と BI^⑧ を主に利用しながら、住民の動向がわかる重要事件の経緯を年代順に提示する。

事例①…五〇四／一一一年

アンティオキア公タンクレードの攻勢に屈し、ハラブの支配者リドワーンは二万ディーナールの貢納などを条件に休戦協定を結んだ。これに対して、ファフルッディーン・ムハンマド・イブン・アルハッ

シャーブとシャリーフ・アブー・ジャアファル・ハシミ（Abū Ja'far al-Ḥasīmī）が法学者、スーフィー、商人の一同と共にバグダードへ行き、セルジューク朝のスルターン・ムハンマド一世にシリア遠征軍の派遣を要請する。彼らはスルターンの宮殿やハリーファの宮殿のジャーミイで礼拝を妨害するといった示威行動を繰り返し、スルターンに遠征軍派遣を承諾させた。アブー・ジャファルとファフルッディーンは、遠征軍がシリア派遣へ向けて準備中であるという情報を持ってハラブへ帰着し、スルターンの書簡がジャーミイで読み上げられた [ATD: 173; KT 10: 482-483; TDM 1: 48a-b; ZH 2: 157]。

事例②…五〇五／一一一年

スルターン・ムハンマド一世が派遣したシリア遠征軍は、まずルハー（エデッサ）を、次いでタッル・バーシル^⑨を攻撃するが、早くも内部分裂が生じて作戦は失敗する。その後、遠征軍はハラブへ向かうが、リドワーンは協力を拒んで市門を閉ざし、イスマール派のアフダースなどを配して市壁を守らせ、糧食を運び出すことを禁じた。このリドワーンの対応に対して遠征軍はハラブを攻撃し、住民はリドワーンを非難して市街は騒然となる。

スルターンの派遣した軍の統率が失われた理由の一つに、総司令官に任命されたハマザン領主ブルスク・ブン・ブルスク（Bursuq b. Bursuq）が病に倒れてラース・アルアイン（Ra's al-'Ayn）に退いていたという事情があった。そこでファフルッディーンとハラブの信仰深い善人たち（ahl al-dīn wa al-ḥayr）の一同が市壁を乗り越えて脱出し、ブルスクの下へ赴いて、彼にハラブへ来るよう求めた。

ファフルッディーンの説得に応じてブルスクは病をおしてハラブへ赴いたが、統一を欠いた遠征軍はさしたる成果も上げないまま解散した [BT 8: 3664-3665; dTD: 173-177; TDM 1: 53b-55a]。

事例③…五〇七／一一一三年—一四年

親イスマール派政策を採り続けていたリドワーンが五〇七年六月二八日／一一一三年二月一〇日に没し、息子のアルプアルスラン (Alb Arslān) が即位した。新君主も当初は同派を優遇し、市街に南接するシャリーフ城を拠点として用いることを認めたので、ファフルッディーンはアルプアルスランを非難した [AH: 18-19]。さらにファフルッディーンはライースのサーイド・ブン・バディ^⑤とイスマール派対策について話し合い、両者を含めたハラブの有力者たち (*wujūh*) はアルプアルスランに同派の行状を訴え弾圧を要請した。その結果、同年八月一八日／一一一四年一月二七日にライースのサーイドが中心となって同派の弾圧が実行され、同派の長イブン・アッサ^⑥ーイグ (*Ibn al-Ṣāʿig*) をはじめとする二百人が捕らえられ、三百人が殺されたという。

事例④…五二二／一一一八年

五一／一一一七・一八年にアルトゥク朝のナジュムッディーン・イルガーズィー (*Najm al-Dīn Ilgāzī*) が一旦ハラブに入るが、すぐに本拠地のマールディーン (*Mardin*) へと戻っていった。^⑦ アンティオキア公国など十字軍側は、休戦協定を反故にしてハラブに対する攻撃を再開した [ZH 2: 181]。この危機に際してハラブの有力者たち

(*wujūh*) はファフルッディーンに苦情を訴え、彼らは合意の上でイルガーズィーに来援を求める使節を送った。^⑧ イルガーズィーは要請に応じてハラブへ来るが、反対勢力が市門を閉ざしたため彼は引き返す。そこでファフルッディーンらが追いかけて連れ戻し、ようやくイルガーズィーをハラブに招き入れた。彼はシリア・セルジューク家の残存勢力の財産を奪い、彼らを内城から追い出した [TDM 1: 122b; ZH 2: 185]。

事例⑤…五一四／一二〇・二年

当時ハラブを離れていた支配者イルガーズィーの許ヘイスマール派の新しい長アブー・ムハンマド (*Abū Muḥammad*) が再びシャリーフ城を求めて使者を送った。同派を警戒するイルガーズィーはその使者を引き止め、伝書鳩をハラブへ飛ばしておおよそ以下のようなことを命じた。まずシャリーフ城と市街部の間の壁を破壊し、この城を十字軍勢力に引き渡そうとした者がいるという噂を広める。最後に、ハラブ人の有力者たち (*wujūh*) が家族や一族とともにそこを占拠してしまう [TDM 1: 152a-b]。

ハラブではアブー・ムハンマドがイルガーズィーに使者を送ったという噂が広まり、ハラブ人の一団 (*jamāʿa*) が話し合ってシャリーフ城を破壊することにした。そこでファフルッディーンは彼らを集めて同城を破壊した。アブー・ムハンマドの使者がハラブに到着したときには、すでに城は破壊され、そこにはシア派とスンナ派の有力者たちの一団 (*jamāʿa min wujūh al-ṣīʿa wa al-sunna*) が住んでいた。イスマール派は再度この城を要求したが、イルガーズィーは先住

窓者の存在を根拠に彼らの要求を拒否したのである。^⑨

史

事例⑥…五一五／一一二二年

イルガーズィーの息子でそのナイーブを務めていたシャムスッダウラ・スライマーンが父に対して反乱を起こす。イルガーズィーはそれを鎮圧し、スライマーンを唆したとしてナースィル (Nasir) という軍人とライースィイブン・クルナースらを捕らえた [KT 10: 592; TDM 1: 161b; ZH 2: 200, 202]。

事例⑦…五一六／一一二二年

この年イルガーズィーが病没し、代わって同じアルトゥク家で彼のナイーブであったバドルッダウラ・スライマーン (Badr al-Dawla Sulayman) がハラブの支配者となった [TDM 1: 179a; ZH 2: 209]。そして再びエルサレム王ボードワン二世などが率いる十字軍勢力がこの年から翌年にかけてハラブを包囲する事態となった。この年彼らはハラブ郊外にあったムスリムの墓を暴き、廟 (mashad) やマスジドを破壊し、ハラブのシリア派にとっては身近な聖地であるマシハド・アッディッカの北側を壊して厩舎とした。この行為に対し、ファフルッディーンはハラブの有力者 (muqaddam) たちとの合意の下、市街部にあったキリスト教教会のうち三つの教会から聖職者や信徒を追い出してマスジドに変えた。さらに彼は、十字軍側がこれらの行為を中止し破壊した場所を復旧しなければ、さらに二教会を取り壊してキリスト教徒を完全追放する旨をボードワンに伝えた。この警告を重大視したボードワンは指摘された場所を旧に復した。^⑩

しかし包囲は解かれることなく、ハラブ内の状況は悪化の一途をたどった。食料が不足して人々は死肉や犬の肉を食べ、戦闘や飢えで死人が出て、十字軍兵士が市壁の近くに陣取っているために遺体を市壁外に埋葬することさえまもなくなくなった。そこでファフルッディーンは、キンナスリ門の近くに穴を掘らせてそこに遺体を埋葬させた。また自分の財貨と穀物をハラブ住民に配給し、防備のためイラク門以外の市門を閉じて石と漆喰で固めさせた [TDM 1: 188a-b]。

事例⑧…五一七／一一二三年

バドルッダウラはアンティオキア公国の攻勢の前にアサーリブ城^⑪を割譲して休戦協定を結んだ。彼を見限ったファフルッディーンは、同じアルトゥク家のフサームッディーン・ティムルタシュ (Husām al-Dīn Timurtas) に使者を送り来援を求めるが拒否される。そこで同家のヌールッダウラ・バラク (Nūr al-Dawla Balak) を招いた [TDM 1: 188b]。ザッジャージーヤ学院 (al-Madrasa al-Zajjiyya) というマドラサを創設したバドルッダウラは、アブー・ジャラーダ家やアジヤミー (al-'Ajami) 家などのスンナ派ウラマーとライースィフアダーイル・ブン・サーイド^⑫の支持を取りつけて抵抗するが、内応者を得たバラクが夜襲をかけてハラブを征服した [TDM 1: 188b, 189b-190b]。

事例⑨…五一八／一一二四年

この年の始めにバラクが戦死するとティムルタシュがハラブを領有したが、短期間の滞在の後、わずかな軍勢を置いて本拠地のディヤー

ル・バクル地方へと去ってしまう。この機会に乗じてマズヤド朝のドゥバイス・ブン・サダカ (Dubays b. Sadaga) が十字軍勢力とともにハラブを包囲した。ファフルッディーンはドゥバイスと書簡を交換し、同じ信条 (一二イマーム派) を持つドゥバイスがハラブを攻撃することを非難し、ハラブを欲するならばまずフランクの諸王を追い払ってから来るようにと伝えた。そこでドゥバイスは十字軍の指導者たちに退去を求めるが、逆に彼らに脅されて逃げ去った [KT 10: 619; TDM 1: 195b-196a, 197a-b; ZH 2: 219-223]。

事例⑩…五二八／一二二四年

ボードワン二世らによる包囲が長引き、ハラブの状態は危機的になる。ハラブを顧みないティムルタシュに対して、ファフルッディーンとハラブ住民はアブー・ジャラーダ家のカーディー・アブー・ガニム・ムハンマド、ナキーブ・アルアシュラーフのズフラ (Zuhra)、アブー・アブドッラー (Abū 'Abd Allāh) ⑤らを派遣する。使節団は十字軍勢力の追跡を振り切ってマールディーンへたどり着くが、ティムルタシュは援助を拒否し彼らを監禁した。その後、使節団の一部はハラブへ帰還したが、アブー・ガニムらはマールディーンを脱出してマウシルのアクスンクル・ブルスキー (Aq Sunqur al-Bursuqi) の下へ赴いた。

ハラブでは絶望感が広がり、ハラブの人々 (*al-nās fi Haleb*) はこの街を明け渡して出て行くことで合意した。しかしファフルッディーンは人々をおし止め、ブルスキーを招くためにマウシルに法学者や長老たち (*šuyūḫ*) を送りこみ、ハラブの窮状を訴えさせた。ブルス

キーは要請に応じて出陣し、五一八年二月／一二二五年一月にハラブへ至りそこを包囲していた諸勢力を撃退した。⑥

事例⑪…五二二／一二二七年

ブルスキーの死後、息子のイッズッディーン・マスウード (*Izz al-Din Mas'ūd*) が父の地位を継ぎ、ハラブにはトゥマン (Tuman) というアミールが任じられていた。そこへセルジュク朝のスルターン・マフムード二世の मामурук であるフトルグアバ (*Ḥuṭūg Abah*) が到来し、トゥマンにハラブの引き渡しを要求した。トゥマンは拒否したが、君主マスウードの急死を知ったライースのファダーイルはフトルグアバをハラブ市街へ入れ、トゥマンに対して内城から降りるよう求めた。君主の死を確認したトゥマンは、千ディーナールを受け取った後に城を明け渡した [BT 7: 3217; TDM 1: 226a]。

六／七月にフトルグアバはハラブ城に入ったが、権力を握ってしばらくするとその悪政が目立ち始めた。さらに、彼がライース・フアダーイルとアルトゥク家のバドルッダウラ・スライマーンの両者を捕らえようとしているという情報が流れ、この二人はアフダースとも協力して、フトルグアバに対して攻撃を仕掛けた。フトルグアバが籠城して抵抗したため、一〇月初めに始まった両勢力の争いは、イマードッディーン・ザンギー (*Imād al-Din Zankī*) が派遣した軍が事態を収拾する同年一二月半ば／一二二七年一二月まで続いた。その間の一〇月に、ハラブの支配権を取り戻そうとするシリア・セルジュク家のイブラーヒーム (*Ibrāhīm b. Rīḡwān*) がハラブへ到来すると、ファフルッディーンの息子ヤフヤー ⑦は他の有力者たち (*wuḡāḫ*) とともに

彼を出迎えている。また、同じ頃にアンティオキア領主のボヘモンド二世が進軍してくると、このイブラーヒムとバドルッダウラ、ファダーイルの三人が和平交渉をおこなった。^⑤

以上、一二世紀初頭のハラブで生じた重要事件の経緯を、住民の動向に留意しながら見てきた。次章ではこれらの事例に基づいて、この時期のハラブにおける住民指導者のあり方について若干の考察を試みる。

二 一二世紀初頭の住民指導者

以上の事例から、この時期に住民の先頭に立って行動した人物の多くは、ライースではなくウラマーなど宗教的権威を帯びた人々であったことが見て取れる。⑥以外の全ての事例にこれらの人物が関わっているのに対して、ライースが関与しているのは③⑥⑧⑪の四例だけである。このうち⑥の事件はアルトゥク朝内部の権力争いであり、この事例からは当時のライースが住民の指導者として振る舞っていたとは考えにくい。また事例③ではファフルッディーンの活動も見られ、事例⑧ではライース・ファダーイルよりもファフルッディーンの方が中心的な役割を果たしている。

これら住民指導者たちの中で最も活発に動いているのがハッシャーブ家の人物で、ファフルッディーンとその息子ヤフヤーのどちらかが、⑥を除く上記の諸事件において常に何らかの関与を見せている。五一一／一一一七・一八年またはその翌年にライース・サードが追放されると、それ以降は特にファフルッディーンの活躍が目立つよう

になる。五一九／一二二五・二六年にファフルッディーンが暗殺された後は、事例⑪に見られるようにライース・ファダーイルの影響力が強まったようだが、その中でもファフルッディーンの後継者ヤフヤーは一定の役割を果たしている。ハッシャーブ家より頻度は少ないもののアブー・ジャラーダ家も三つの事例(④⑧⑩)で言及されており、ウラマーの家系としては、この両家が当時のハラブ住民の間で指導的な立場にあったことがわかる。

1 住民指導者と支配者

ここで当時の住民指導者と支配者との関係について考えてみたい。以上の事例には住民指導者の行動が支配者の利害と対立する場合が多く見られる。特に救援要請のための使節派遣は新しい支配者を迎え入れることにつながるため、事例①②⑧のように現在の支配者の抵抗に遭うのが普通であった。⑩の場合も最初こそティムルタシュに救援を求めているが、それが拒否されると別の軍人の下へ使節が赴いている。ウラマーが外交使節として活躍することは珍しくないが、支配者の名代として派遣されることが多いザンギー朝時代以降とは支配者との関係が異なることに注意しなくてはならない。^⑥この時期の住民指導者たちの行動からは特定の君主や王朝に対する忠誠心はあまり読み取れず、自分たちにとって最もよい君主を選ぶという態度が明白に見られるのである。

一方君主たちの方もハラブの領有が採算に合うかどうかを見極めながら行動している。事例⑩で使節として活躍したアブー・ガニムの孫アブー・アルハサン・アフマドは、その経緯を説明して「当時のハ

ラブはフランク（十字軍勢力）が隣接しており、土地は荒廃して税収が少なく、そこを支配する者は財庫や金銭や軍事費が必要だったので、諸王はハラブをほとんど欲しなかったのである」と述べている【BT 4:194】。この時期のハラブの支配は大きな代償を伴う事業だったのである。したがって救援を求めるに当たっては、十字軍に対する聖戦という大義を唱えるだけでは不十分であった。事例④ではハラブ支配に消極的なイルガーズィーを説得するために、ファフルッディーンたちは彼の保護（*himaya*）に対する対価の支払いを保証している【TDM 1:122b】。また、事例①でハラブ使節の代表団が宮殿での礼拝の妨害という暴挙に出たのは、なかなかシリア遠征軍を組織しようとしないうちにセルジुक朝スルターンに圧力をかけるためであったと思われる。支配者や軍人を動かすために、ハラブの住民指導者たちは硬軟さまざまな方策を採ったのである。

ハッシャーブ家やアブー・ジャラーダ家の人物が支配者に対して以上のような態度を取り得た理由としては、経済的にも地域社会における権威を保持するためにも両家が特定の支配者に依存する必要性がなかったという点を指摘できる。この両家は大規模な農地経営を経済基盤とし、カーディーを代々輩出するハラブの名家であった^③。事実上世襲されていたカーディー職を除くと、この時期に至るまで両家の出身者が公職に任命されたり君主に仕えたことを示す記録はない。五一一／一一一八年以降、ファフルッディーンが都市運営の責任を負っているとする記述や、彼と息子のヤフヤーをライースと呼ぶ記事が現れるようになるが、両者の権威やライースという肩書きは支配者から与えられたものではないと考えられるのである^④。

事例⑧は、以上のようなハラブのウラマーたちと支配者との関係に変化が見られ始めたことを示す出来事である。ハラブを防衛する能力を疑われたにもかかわらず、バドルッダウラがシンナ派ウラマーの支持を得たのは、彼がザッジャージーヤ学院というハラブ最初のマドラサを創設したからであった。彼を支持した勢力の中でもアジャミー家は特にこのマドラサと深い関わりを持った家系で、複数の人物が教授や管理者に就任している。同家のようにマドラサの創設などを通じてウラマーたちが支配者との結びつきを深める姿は、ザンギー朝時代以降にはごく普通に見られるようになっていく【谷口一九九六・七二―七三、七七―八一頁】。

2 住民指導者と住民

住民指導者と住民との関係については情報が少なく、包括的に論じることには難しい。そこで本節では、最も大きな影響力を見せたハッシャーブ家に焦点を当てて考察することにする。住民との関係を考えながらハッシャーブ家の動向を追っていくと、同家のファフルッディーンでさえ、決して全住民を統制下に置くような存在ではなかったというのに気付く。彼がライースや他の有力者たちと合議の上で行動を起こしたと考えられる事例がかなり見られ【③④⑤⑦⑩】、またファフルッディーンが招いた君主が反対派の抵抗に遭うこともあったからである【④⑧】。

事例⑧で反対派の抵抗に遭ったバラクから密かに協力を持ちかけられたアリー・ブン・マスウード（‘Alī b. Mas‘ūd）という人物は、バラクをハラブへ招き入れるためにファフルッディーンに協力を求め

窓 た。それに対してファフルッディーンは、彼の策略に協力はないが

史 黙認する旨を伝え「あなたが信用する民衆（*amma*）は、私や私の仲間たち（*ashab*）よりもあなたにとって役立つ」と言っている [TDM

1:100b]。そこでハラブの無頼漢たち（*su'ita*）の一人とされるアリ

ーは、民衆とごろつき（*sūqa*）を集めて夜に市門を破り、バラクを招き入れることに成功した^④。このフリーという人物やそれに従った民衆の存在は、ファフルッディーンが直接強い影響力を及ぼし得た住民が限られていることを示唆している。

しかしその一方で、ファフルッディーンが「仲間」と呼んだ者たちの存在が目を引き。五二〇／一一二六・二七年、ファフルッディーンの息子ヤフヤーとアジャミー家のアブドッラフマーン（*Ṣaraf al-Dīn 'Abd al-Rahmān al-'Ajāmī*）が言い争った際には、ヤフヤーの仲間たちが後者を殺害しようとして暴行を加えている^⑤。先の事例と併せて考えると、ハッシャープ家の二人と行動を共にした「仲間」とは、場合によっては暴力行為に及ぶこともある護衛のような役目も果たす集団であったように思われる。この「仲間」について詳しいことは不明であるが、ハッシャープ家という血縁集団と「仲間」がファフルッディーンやヤフヤーを支持する勢力の核になっていたのであろう。

右に見たようにハラブ住民は幾つかの勢力に分かれていた。史料では「先頭に立つ者（*mugaddam*）」「顔役（*wujūh*）」などと呼ばれ本稿では有力者と訳した人々が、これらの諸勢力を率いていたと推測できる。ファフルッディーンとヤフヤーは彼らの中の第一人者というような存在だったのではないだろうか。そして危急の際には、これらの有力者が合議の上、ファフルッディーンを中心に協調して行動をとったのであろう。

たのであろう。

む す び

一二世紀初頭のハラブでは、ライースに代わってウラマーなど宗教的な權威を有する人々が住民指導者として台頭し、彼らの支持無くしてはこの都市を安定して支配することは困難であった。しかしこれらの住民指導者たちも軍人による支配自体を否定していたわけではなく、むしろ十字軍勢力やイスマール派の脅威からハラブを守るために、強力な軍隊とそれを統率する君主を必要としていたのである。その意味で、この時期のハラブの状況を単純に「住民の自治」と見なすことはできない。しかしながら、住民指導者たちの期待に沿えない支配者が、彼らの支持を失ってその地位を追われるという事態が見られたのも事実である。

新たに台頭した住民指導者たちの中でも、一二イマーム派の名家であるハッシャープ家のファフルッディーンが中心的存在として振る舞った。指導者たちの相互関係、あるいは彼らとアフダースや他の住民との関係についてはわからない点が多い。しかし、住民や住民指導者たちが幾つかの勢力に分かれており、ファフルッディーンも他の有力者たちと合議の上で行動していたということは指摘できる^⑥。

この後ハラブを半世紀以上にわたって支配したザンギー朝は、マドラサ創設やスンナ派式アザーン導入など宗教政策に腐心したことで知られる^⑦。その背景には様々な要因が考えられるが、このように住民指導者として台頭したハラブのウラマーたちへの対処もその一つであったと考えられるのである。

註

- ① ハンシャープ家は二イマームシーア派の名家で、アブー・ジャラーダ家は代々スンナ派のカーディーを輩出してきた家系である。いずれの家も一世紀にはハラブで名を知られる存在となっていた。両家については、谷口淳一「十一—十三世紀のハラブにおけるウラーイー三家系」『史林』七九巻一号（一九九六年）：六一—九四頁を参照せよ。この論文は以下「谷口一九九六」と略記する。
 - ② シリアのイスターイー派については下記を参照せよ。Nasseh Ahmad Mirza, *Syrian Ismailism*. Richmond, 1997; B・ルイス（加藤和秀訳）『暗殺教団』神泉社、一九七三年：一四二—一八〇頁。
 - ③ 谷口淳一「ハラブ史の中のライース達」『西南アジア研究』四九（一九九八年）：三四—五二頁。この論文は以下「谷口一九九八」と略記する。
 - ④ C. Cahen "Mouvements populaires et autonomisme urbain dans l'Asie musulmane du moyen âge, I." *Arabica* 5 (1958): 232-233. この論文は以下 Cahen 1958 と略記する。
 - ⑤ 大川原香子「ビジュラ暦五〜六世紀のアレクサンドリアにおける都市自治について」『學藝史苑』二九（一九八四年）：二七—四九頁。この論文は以下「大川原一九八四」と略記する。
 - ⑥ A. Havemann, *Ri'āsa und Qadā'*. Freiburg im Breisgau, 1975: 124. 本書は以下 Havemann 1975 と略記する。ライースと訳されたハンシャープ家の人物を他のライースと区別すべきであるということとはすでに指摘した【谷口一九九六：八五、八八頁注⑨】：谷口一九九八：四五一—四六頁。
 - ⑦ 第一章の事例に登場するような、住民の先頭に立って行動したり住民の合意形成の中心になった人物のことを「住民指導者」と呼ぶこととする。本稿で用いた史料の略号は以下の通りである。
 - AH: 'Izz al-Dīn Muḥammad Ibn Ṣaddād, *Alīq al-ḥa'ira fi ḡīḥr umarī al-Ṣām wa al-Jazīra*. (the volume on Ḥalab). Ed. D. Sourdel. Damascus, 1953.
 - Azi: Muḥammad al-'Aḡimī, *Tarīḥ Ḥalab (Tarīḥ al-'Aḡimī)*. Ed. I. Za'rūr. Dimasq, 1984.
 - BT: Kamāl al-Dīn 'Umar Ibn al-'Adīm *Buḡyat al-Jalab fi tarīḥ Ḥalab*. Ed. S. Zakkar. 10 vols. + index. Dimasq, 1988.
 - DTD: Ḥamza Ibn al-Qalanisi, *Dayl Tarīḥ Dimasq*. Ed. H. F. Amedroz. Beirut, 1908.
 - KT: 'Izz al-Dīn 'Alī Ibn al-Aḡr, *al-Kāmil fi al-tarīḥ*. 12 vols. + index. Bayrūt: Dar Ṣādir, 1979-1982.
 - TDM: Nāsir al-Dīn Muḥammad Ibn al-Furāt, *Tarīḥ al-durwal wa al-mulūk*. 9 vols. Mss. A. F. 117-125. Die Österreichische Nationalbibliothek. Wien.
 - ZH: Kamāl al-Dīn 'Umar Ibn al-'Adīm, *Zubdat al-ḥalab fi tarīḥ Ḥalab*. Ed. S. al-Dahhān. 3 vols. Dimasq, 1951-1968.
- ⑥ 当該時期の複雑な政治史については、大川原一九八四：三八—四三頁を参照せよ。
- ⑦ Faḡr al-Dīn Muḥammad Ibn al-Ḥašṣāl. 史料ではこの人物の名称をフン・フルハンシャープとだけ記されるものが多く、愚千ヤフヤーと区別するため、本稿ではフアンルハディーヤーンとラカンを記することとする。なお、彼のクンヤは史料によって異同がある。TDMとZHはAbū al-Faḡl al-'AHと、AHとAbū al-Ḥasanとする。この人物については、谷口一九九六：二三八頁を参照せよ。
 - ⑧ Tall Bāṣir. カンから北へ二日行程に位置する。早くから十字軍勢力の一拠点であった【G. Le Strange, *Palestine under the Moslems*. Boston et al., 1890. New York, 1975: 542】。
 - ⑨ リヤノーンの親イスターイー派政策については、A. M. Eddé "Ridwān, prince d'Alep de 1095 à 1113." *Revue des Études Islamiques* 54 (1986): 116 ff. を参照せよ。
 - ⑩ Sa'īd b. Badī'. この人物については、谷口一九九八：三七—三八頁を参照せよ。
 - ⑪ AH: 18-19; TDM 1: 71a-b; ZH 2: 168-169. AH では五〇八年のことでないことが、TDM 1: 71b では日付が入っており情報もより詳細なので後者の年代を採る。なお、かつて私はフアンルハディーヤーンがイスターイー派と敵対した事例はこの一件しか知られていないと述べたが【谷口一九九六：八五頁】、本稿の事例⑥に当たる事件で彼が同派に對す

る反対運動を指揮していたことがその後わかった。ここに先の誤りを訂正しつつ。

- ⑮ Azī: 368; KT 10: 531-532; ZH 2: 180. TDM ではヒジュラ暦五一二年の部分にこれら一連の事件がまとめて載せられているが [TDM 1: 121b-123b]、これは著者の編集作業の結果と思われる。年代は同時史料の要約である Azī が正確であらう。

- ⑯ TDM ではこの使節に関して複数の伝承が併記されている上に出典が不明確なので、どの伝承が事実をもっともよく表しているかは見極めがたい。使節として赴いた人物に着目して大きく分類すると以下のようになる。(1) ファフルディーン自身が赴いた [TDM 1: 122a]。 (2) アブ・アル・ファドル・イブン・アル・アディム (Abū al-Faḍl Ibn al-'Adīm) が派遣された [TDM 1: 120b, 121b]。後者の情報に現れるアブ・アル・ファドルは、クンヤからアブ・ジャラーダ家のヒバトッラー二世と思われる。彼は四九九／一〇〇六年生まれなので当時一二歳とかなり若い。この時期にこのクンヤを持つ同家の人物は他に確認できない。ヒバトッラー二世については、谷ロ一九九六・六九七〇頁を見よ。

また TDM 1: 121b では *Abū Salīm* と *Abū 'Alī* という人物が派遣されたとあるが、この二名についてはよくわからない。前者はハラブ人法学者、後者はクルド人の男とだけ記されている。なお ZH はこの使節団については個人名を挙げず、ハラブ住民 (*ahl Ḥalab*) がハラブの名士や有力者 (*al-a'yān wa al-muqaddamīn*) を派遣したと述べるだけで *al-ZH* 2: 185⁹。

- ⑰ TDM 1: 152b, ZH 2: 199 では、同じ年にシャリフ城からリドワーンに仕えていた兵士たちが追い出され、同城が破壊されたとされている。またその実行者はナーイブのシャムスッダウラ・スライマーン・ブン・イルガズィー (*Šams al-Dawla Sulaymān b. Ilgāzī*) とライースのイブン・クルナース (*Ibn Qurnās*) とされている。この城に拠っていたリドワーンの遺臣たちが追い出された後に、イスマーイール派がそこを利用しようとしたのであらう。

- ⑱ *Mashad al-Dikka*. 現在もハラブ旧市街西側のジャウシャン (*Jawšān*) 山にある。ハムダーン朝のサイフッダウラが三五一／九六二・六三年に

al-Muḥassin b. al-Ḥusayn b. 'Alī b. Abī Ṭālib なる人物の墓を「発見」し、*ṣayyid* 廟を建った [AH: 48-50]。

- ⑲ 以上の記述は TDM 1: 179b-180a と ZH 2: 214-215 に拠る。ただしファフルディーンの警告文は前者にのみ見え、「有力者との合意」という文言は ZH にのみ現れる。なお、ここでは三つの教会が言及されているが、最終的には四教会がマスジドに変えられた [AH: 41]。なお、この事件が生じた時期は、史料によってヒジュラ暦五十六年 [TDM]、五十七年 [ZH]、五十八年 [AH] と異同がある。

- ⑳ 男は二単位 (*farḡānī*)、女と子供は一単位 (*farḡā*) とあるが、具体的な量・額は不明である。

- ㉑ *al-Aṣṭrib*. ハラブの西南西約三〇キロメートルに位置する。

- ㉒ アジャミー家は、一二世紀半ばにハラブへ移住してきたシャフィイー派法学派のウラマー家系である。ザッジャージーヤ学院の創設をバドルッダウラに働きかけたのは同家の人物で、以後も同家はこのマドラサと密接な関係を保った [谷ロ一九九六・七七一八一頁]。

- ㉓ *Faḍāl b. Sū'īd*. 事例③に現れるライース・サーイードの息子 [谷ロ一九九六・三九頁]。

- ㉔ *Abū Ḡānim Muḥammad b. Hibat Allāh Ibn Abī Jarāda*. この人物については、谷ロ一九九六・六八六九頁を参照せよ。

- ㉕ スフラとアブ・アブドッラーの両者は TDM では言及されていない。後者がどうい人物であったかは不明である。

- ㉖ BT 4: 1963-1967; TDM 1: 198a-b, 200b-201a; ZH 2: 225-228. この事例の経緯についても史料により若干の差異がある。イブン・アビー・タィ (TDM) は、マールディーンへ派遣された使節がティムルタシュに援助を拒まれてハラブへ帰還し、改めてファフルディーンがブルスキーンに使節団を送ったとしている。一方 BT と ZH は、一行がマールディーンからマウスィルへ直接赴いたとする。イブン・アビー・タィの主な情報源である彼の父と祖父は当時ハラブにいたと思われる。BT と ZH の情報は使節の一人であったアブ・ガニムからの伝承に基づいている。実際、TDM の記述は使節を派遣した側の事情に詳しく、BT と ZH は使節団自体の様子を詳細に伝えている。双方の伝える情報はともに信頼性が

高いと考えられ、上記の齟齬は情報源となった人物の立場の違いを反映した情報の一部欠落が原因と考えられる。したがって、マールディーンに派遣された使節団のうち一部はハラブへ帰還し、アブー・ガーニムらは直接ブルスキーの許へ赴いたと考えるのが妥当であろう。

②⑦ Yahyā b. Muḥammad Ibn al-Ḥaṣṣīb, 五一九／一一二五・二六六年にファフルディーンが暗殺された後、その地位を継いだ。この人物については、谷ロ一九九六・八五―八六頁を参照せよ。

②⑧ BT 7: 3217-3219; TDM 1: 226a-227a. イブラーヒームとボヘモンドの到来時期が史料間で食い違う。TDM は、一〇月下旬にイブラーヒームが到来し、その後ボヘモンドが攻めてきたとする [TDM 1: 226b]。一方、BT ではボヘモンドとの交渉は同月一二日とされ、イブラーヒームの到着時期が一〇月末となっている [BT 7: 3218]。

②⑨ その後五一三／一一一九・二〇年に暗殺される [谷ロ一九九八・三八頁]。

③⑩ ハラブのカーディーが外交使節として派遣された事例については、谷ロ淳一「一一―一三世紀ハラブのカーディーと支配者」『東洋史研究』五七巻四号(一九九九年)・七八―七八六頁を参照せよ。この論文は以下「谷ロ一九九九」と略記する。

③⑪ Abū al-Ḥasan Aḥmad Ibn Abī Jarāda. この人物については、谷ロ一九九六・七二―七三頁を参照せよ。

③② 谷ロ一九九六・八九―九〇頁・谷ロ一九九六・七八―七八九頁。

③③ 谷ロ一九九八・四五―四六頁。ここで言及されていない事例として、五一六／一二二二年にバドルッダウラ・スライマーンがファフルディーンにハラブの諸事を任せた (*ḥāḍa amr Ḥalab ilay-hi*) と言われている [TDM 1: 179a] という記述をあわせておく。

③④ TDM 1: 190b. この事件については、谷ロ一九九六・八四頁も参照せよ。

③⑤ TDM 1: 214a. アジャミー家のアブドッラフマーンについては、谷ロ一九九六・七七―七八頁を参照せよ。

③⑥ 一一世紀後半から一二世紀初頭にかけて、地中海沿岸のタラーブルス(トリポリ)でもカーディーが権勢を振るった。しかしここではアンマー

ル家のカーディーが自ら軍隊を持ち支配者として君臨しており、ハラブとはかなり異なった状況が展開した [佐藤次高「一一―一二世紀シリア地方社会の裁判官」『オリエンツ』三四巻二号(一九九二年)・五一―六頁]。

③⑦ ザンギー朝のマドラサ創設をめぐることは、さしあたり、阿久津正幸「ザンギー朝アレppoのマドラサ建設」『イスラム世界』五三(一九九九年)・一一二五頁を参照せよ。